

讃岐香川の様々な文化発展を応援します。

# 文化通心

B U N K A T S U S H I N

2026夏 No.130



## 讃岐漆芸の新たな未来

アートフェア東京に参加した香川県漆芸研究所。香川県は、新たな漆芸の担い手を育成して来た。漆芸の人間国宝が先生として後進の指導に当たっている。玉楮象谷に始まった讃岐漆芸は、未来に残していくべき技術だと全国から生徒さんが集まっている。この事を讃岐の人たちにも知って欲しい(写真左:北岡道代さん、右:菅野かおりさん)。

- 平田家文書「讃岐大野原之用覚日記」解説、出版
- 刻の方舟
- 7月懸釜「北村美術館茶会」のご案内
- 6月から8月までの茶華道情報／財団からのお知らせ

発行：公益財団法人 中條文化振興財団  
〒760-0017 高松市番町2丁目1番12号  
TEL(087)826-3355 FAX(087)826-2212  
2026年夏号 No.130 6月1日発行(季刊)

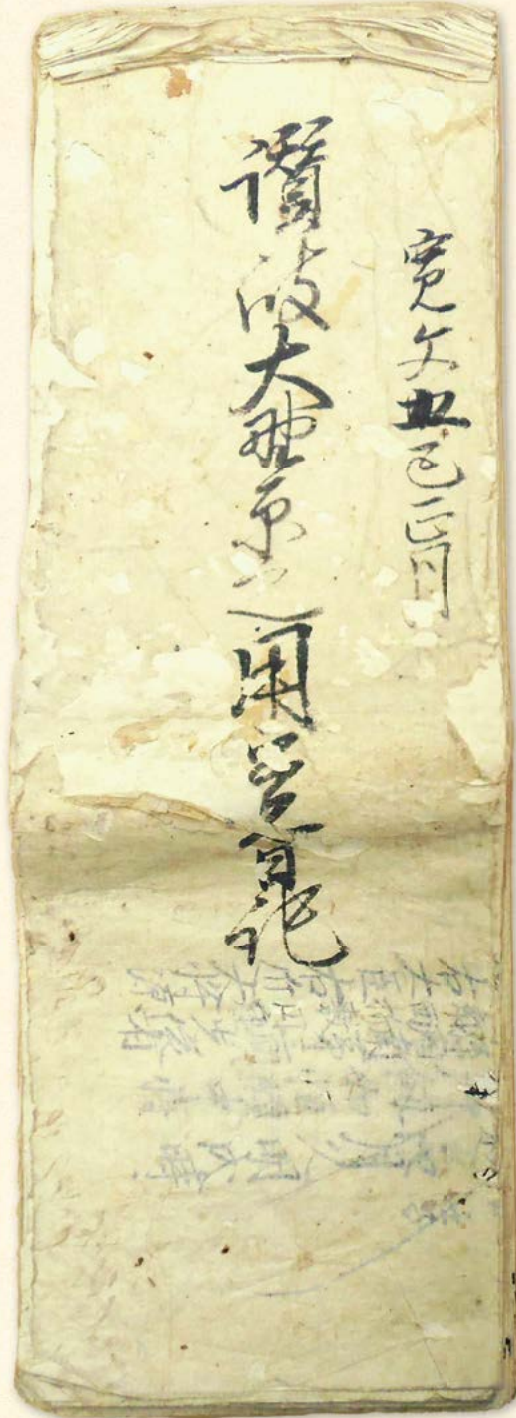
令和八年度助成事業

ひら た け もん じょ さぬ き おお の ほら の よう おぼえ にっ き

# 平田家文書「讃岐大野原之用覚日記」

## 解説、出版

観音寺市文化財保護協会 会長 請川富子



観音寺市有形文化財 平田家文書  
寛文五（一六六五）年巳正月  
「讃岐大野原之用覚日記」

### 発刊にあたり

観音寺市文化財保護協会の会員で構成している観音寺市古文書研究会で、平田家文書「讃岐大野原之用覚日記」平田家当主、平田正澄の寛文五年の日記を読み解きました。その成果をどうしても一冊の本にまとめ発表したいと思っていました。

何故、今回の出版を企画したかと言

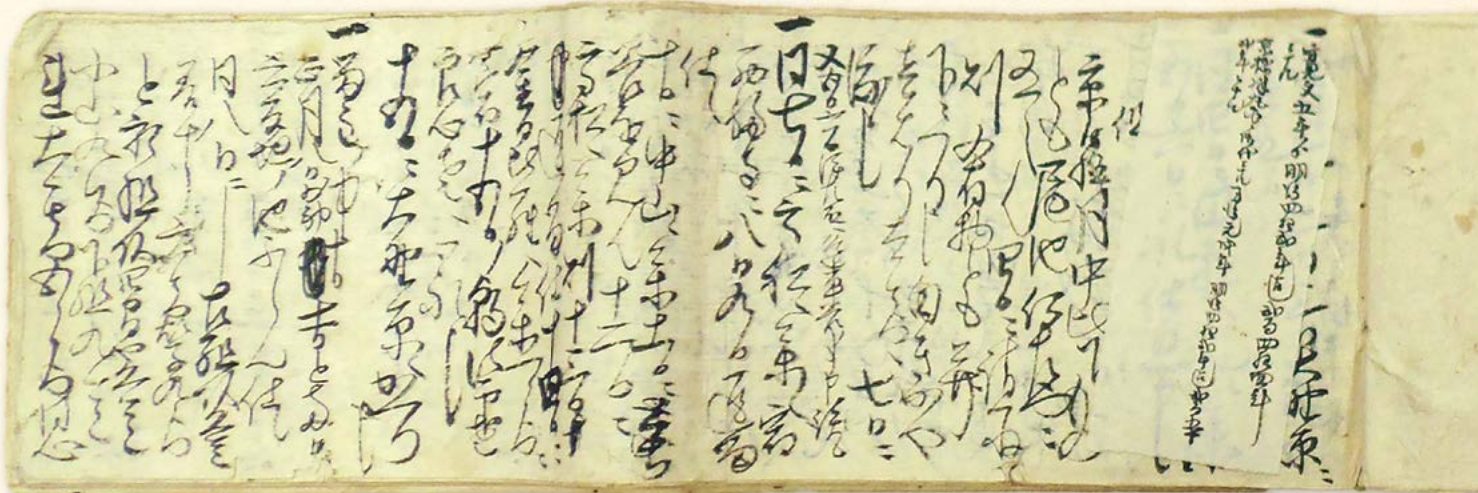
ますと、この文書は町人請負新田開拓者が記録した重要な文書であるにも拘らず、長く平田家に秘蔵されていた為、歴史にも、市史や町史にも成果が反映されておりません。それだけに、これを公開する意義は計り知れません。

又、寛文五（一六六五）年は、徳川幕府が初めて全国の大名領で「宗門改め」を実施した年であり、その時の藩や地域の様子を克明に記されており、それを読むと、宗門改めがその一年目から、

むしろ人別改めとして地方の、為政者や村の役人たちに認識され、機能していたことが解ります。そのことは、日本の社会史を考える上で、大変重要な事実であります。

### 大野原開基の祖、平田家とは

生駒藩がお家騒動で改易され寛永十八（一六四一）年、山崎甲斐守家治が入部し、丸亀城を修復する事になった。京都



の平田与一左衛門の手代四人が入札に参加しようとしたが入札が終わっていた。そこで四人は城普請を諦め、新田開発の土地を求め大野原原野の開墾を始める事になる。

まずは、生駒時代に藤堂高虎の家臣であった西嶋八兵衛が、手掛け様とした井関池築造に着手する。この平田家のおかげで荒野だった大野原が大きく発展することになる。

その平田家が、大野原開墾を開始して三八年になる。平田家の広大だった屋敷跡は、昔の面影はなく田園となり、現在は民間企業の工場が立っている。

## 観音寺市古文書研究会の歩み

観音寺市古文書研究会は昭和六十二年に古文書講座を開催していたが、二年後昭和六十四（平成元）年古文書研究会を正式に発足する。古文書の解説を通して次の文献を刊行する。

「一ノ谷池関係古文書」（平成四年）、「黒洲村百姓越境記録」（平成五年）、「大庄屋西山家文書 江戸期の民政」（平成九年）、「宇喜多家・横山家文書 江戸期の民政II」（平成十三年）。

その後、古文書研究会として、しばらく書籍を発刊していなかったが、令和五年私達は、平田家文書の第一弾として大野原開基三八〇年記念誌「尾池平兵衛覚書に見る江戸前期の大野原」を発刊すると非常に反響が大きかった。

今回、御財団の助成を受け、平田家文書第二弾を刊行する運びになりました事は、大変有難く感謝申し上げます。

## 文化財保護協会の 沿革・組織・運営・活動

法隆寺金堂の火災をきっかけに「文化財保護法」が昭和二十五年に制定され、昭和二十八年に「香川県文化財保護協会」が設立された。その後、各市町村に支部を置き、「香川県文化財保護協会観音寺

支部」が誕生する。

香川県文化財保護協会観音寺支部では、事業部会・編集部会・研修部会に分かれて様々な活動をしている。

今回、御財団に申請したのは、この三部会の垣根を越えて会員有志で活動している「古文書研究会」であります。

平田家文書は、観音寺市教育委員会が二百九十冊程保存している。今後も、観音寺市古文書研究会は、平田家の歴史を古文書から読み解き、現代語に訳して若い世代に引き継いでいきたいと思えます。

## まとめ

文化財保護協会の課題は、歴史・文化遺産をどう若い世代に繋いでいくか、若い人たちと、どう融合するか、真剣に考えていかなければ未来はない。

その為には、県市町村、学校教育者、神社仏閣、中高大学生達と推進していく環境作りをしなければならぬ。

観音寺市文化財保護協会  
代表理事 前田隆



平田屋敷「春秋館」の銅板画（明治29年）



右から、民俗研究会「郷土の発酵食品」、古文書研究会「尾池平兵衛覚書に見る江戸前期の大野原」、文化財保護協会「豊浜暁部隊の記録」



文化財協会報 毎年三月発行



《まなざしの森》art venture ehime fes (2025)

©art venture ehime fes 2025 / Takako Hasegawa

令和八年度助成事業

# 刻の方舟

TOKINO

HAKOBUNE

切り絵作家  
長谷川隆子

2026年  
6月13日(土)~8月2日(日)  
高松市塩江美術館

私は、地域の歴史や暮らしに受け継がれてきた記憶や物語を調べ、四国の和紙を用いた切り絵のインスタレーションを制作しています。照明によって生まれる光と影を取り入れながら、土地に宿る気配や時間を、空間の中にすくい上げることを大切にしてきました。

学生時代には絵画と彫刻を学び、国内外で発表を重ねてきましたが、四国に戻ってからは生活の基盤が子育て中心へと変わり、制作から離れる時期がありました。子どもと過ごす日々の中で、小さな虫や雲の動き、光の移ろいに目を向けるうちに、身近な自然の中にこそ芸術の根源があるのではないかと考えるようになり、土地の守り神をテーマにした「うぶすな」などを通して、地域に受け継がれてきたものへと関心が広がっていききました。

そうした変化の中で、再び手を動かすきっかけとなったのが、次女の妊娠中に長期入院をしたことでした。何もできない療養中に手慣らしのように紙を切り始めたことが、制作へ戻る入口になりました。紙産業が盛んな愛媛県四国中央市で育った私にとって、紙は身近な素材でし

た。机の上から始められ、積み重ねながら大きな空間へも広がっていきける切り絵は、当時の暮らしに合った制作手段であり、絵画や彫刻とも自然につながるものでした。

大きな転機となったのが、「よるしるべ2016」への参加です。観音寺の夜の町並みを歩きながら、見慣れた場所を美術を通して再発見する取り組みで、いりこ漁業の気配が残る赤煉瓦倉庫では、寛永通宝や海にまつわるモチーフ、有明浜の映像を重ねました。

その後は、塩江町に伝わる別子八郎の大蛇退治の民話から着想を得たり、讃岐平野に残るタバコ乾燥小屋で展示をしたり、土地の守り神をテーマにした「うぶすな」などを通して、地域に受け継がれてきたものへと関心が広がっていききました。

また、新長谷寺藝術祭では、三十三年ぶりにご開帳された本尊・十一面観音菩薩の眼を主題に、極楽浄土を思わせる文様と戦災や人災の影を忍ばせた「慈眼」を発表しました。現代の私たちは、観音菩薩にどう映るのか。その問いを作品に



《うぶすな》高松市石の民俗資料館(2023)

撮影:宮脇慎太郎



《火焰》かがわ・山なみ芸術祭(2020)

撮影:宮脇慎太郎

そこには、動物を管理するための太く頑丈な鉄の柵があり、切り絵を遮り、鑑賞の妨げになるのではないかとという不安もありました。柵は、人間と動物が安全に向き合うための装置であると同時に、越えられない境界でもあります。しかし設置してみると、紙から生まれた影は壁や床だけでなく鉄柵にも映り込みました。影はその存在を消すのではなく、人と動物との関わりにある愛情と葛藤を受け止めながら、境界の意味を強く浮かび上がらせた。

動物園での制作を通して、そこが動物と出会う場所だけでなく、命の大切さや儚さ、力強さを伝える「命の博物館」でもあることを学びました。絶滅の危機にある種を守るため、動物園同士が連携す

込み、見る人自身へ問いを返す制作へとつながっていきました。

2025年10月、愛媛県と東京藝術大学によるアートベンチャーエヒメフェス2025に選出され、県立とべ動物園の旧インドゾウ舎で「まなぎしの森」を発表しました。かつて二頭のゾウが暮らし、やがてオランウータン舎として再生されるこの空間で、記憶を受けとめながら、新たな命を迎える「切り替わりの時」を作品の軸に据えました。全長十三メートルの横長の一枚絵には、密生する草木の中に動物の姿を忍ばせました。鑑賞者は、何かがそこにいた気配を受けとめながら、自身の動物園での記憶や思い出を重ねていきました。

会期中には、ダンサー、音楽家とともにパフォーマンスも行い、切り絵の空間に身体と音、光の変化を加えます。静止していた作品に時間が流れ込み、見る側と見られる側、人間と動物、自然との関係は、固定された立場ではなく、揺れ動くものとして感じられるはず。刻の方舟が命と向き合うための時間を伴った体験へと広がっていくことを目指しています。

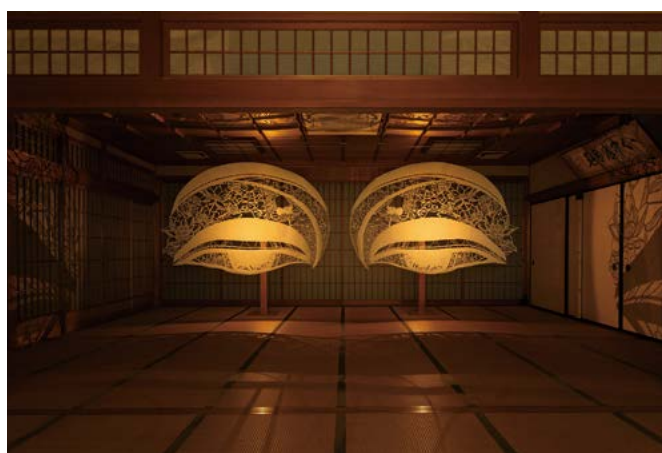
切り絵による制作を始めて、今年で十年の節目を迎えます。今後も四国の和紙と真摯に向き合い、土地に宿る物語や生きものの気配を、紙と光と影で表現していきたいと思えます。

る現状にも触れ、自然や生きものとう向き合ってきたのかを考えるきっかけとなりました。

こうした経験は、高松市塩江美術館で開催する個展「刻の方舟」へとつながっています。旧約聖書に登場するノアの方舟の物語を手がかりに、絶滅した動物や、いまなお生存の危機にある動物たちに目を向けます。かつて方舟は、大洪水という天災から生き延びるためのものだった。いま現在、環境破壊や無分別な狩りなどによって生命をおびやかされている動物たちは、この人災から生き延びるための舟を探し求めているのではないのでしょうか。光と影の移ろいの中で、そもそも方舟を必要としてしまった世界を見つめ、私たちがどのような未来を選ぶのかを静かに問いかけます。



《まなぎしの森》art venture ehime fes(2025)



《慈眼》新長谷寺藝術祭 十一面(2024)

撮影:CRIE

ご案内

# 7月懸釜「北村美術館茶会」

北村美術館 館長 木下 收

財団のお茶室の建築当初から何かとご縁をいただきました北村美術館さま。平成二七年の秋には、長次郎の「太夫黒」で釜を懸けていただいたり、夏期講習でもお話をいただきました。木下館長さんとは西行法師ゆかりの場所を巡ったりと思ひ出もたくさんあります。この度もどんな驚きのお茶会になるのか楽しみにしております。

私どもの美術館は、京都に於ける茶道美術館の魁として生まれ、来年開館五十年を迎えます。

私個人としては、五十年以上前から、ある奉仕倶楽部で、中條家から京都へ嫁がれた方があり、その旦那さんに弟子入りしていたため、お家へも伺って奥様からお里の中條家、とりわけお兄様のことをよく聞きました。その後「美藻庵・晴松亭」の茶席に、我が家の吉野杉を使いたいと、数寄屋普請の木下孝一棟梁から相談があり、使って頂いたので、親近感には余計に深まりました。

一方、美術館の庭園には、白峯山の宝塔と五重塔が夫々ありますが、折角の機会ですから、我々が「席前の寄せ燈籠」と呼んでいる讃岐に縁のある三点目を紹介しておきましょう。

茶苑として観た場合、一番重要な席は、小間の珍散蓮ちんさんれんであります。そこへ席入りするためには嵯峨・嵐山の渡月橋の礎石を転用した手水鉢を使います。元は橋の控え柱で、水穴が斜めに彫られて



いるのが特徴です。その鉢で俗世間の塵を洗い清め、市中の山居とたとえられる茶席へ向かう心の準備をするのですが、蹲すまつての見付燈籠の役をするよう添えられていた燈籠ですから大切なものです。当然主人の北村が見立てたもので、長岡京出土の宝珠、奈良砥石の塔笠、大佛の金燈籠が生まれ、その受台の役をしているのが、讃岐・志度寺の海女の墓石であります。年代的にも、素材的にも様々なものが用いられていますが、北村からの言い伝えのないところをみると、その自信が窺えます。

七月の京都は、一日、祇園祭吉符入り

に始まり、二日、市長立ち合いでの籤取り式で、巡行の順番を決め、宵々山、宵山から山鉾巡行の十七日、二十四日両日を経て、三十一日の大茅輪くぐり夏越祭を終えるまで、祇園祭一色に染まります。

その頃までには、冬は底冷え、夏は蒸し風炉といわれる有難くない京都名物もやってきますし、気象庁が発表した「酷暑日」も数日あることを覚悟しなければなりません。御地へお伺いする日が、潮風交りの涼しさをよぶ避暑旅行になることを期待しながら、北村美術館らしいと想っていただけの道具組みになるよう、構想を摘んだり崩したりすることでしょう。

夏の道具の組み方は、何をさて置いても涼しさが御馳走であって、難しいものは避け、軽妙洒脱なものが悦ばれ、極端に申せば、涼を呼ぶものでさえあれば何でもよいということになります。

茶会での主客が、一座建立するためには、言わぬが花で何もかも黙して語らずではありますが、「晴松亭」の玄関寄付の床掛物は、こうしようとして決めていますので、予告するのも一興かと、ここに案内しておきます。

涼しさはたぐひも更に夏山の

峯より落る音なしの滝

八十八翁 大綱



とある白紙画賛と呼ばれるこの軸は、余程人氣があったのか、この時季になると道具屋さんの店頭でよく出会います。大綱和尚（一七七二〜一八六〇）は、大徳寺第四三五世となった方で、幕末の大徳寺僧では、宙宝和尚とともに並び称されるお茶の世界で知られた方です。小さく賛を書き、余白の紙面を充分にとって涼しさを味わっていただこうという工夫がここにも観られます。以上皆様とお会い出来る日を今から楽しみにしながら筆を擱きます。

## 7月懸釜「北村美術館茶会」

日時 7月12日(日)  
 処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)  
 席主 北村美術館 館長 木下 收  
 会費 25,000円(濃茶・薄茶・点心席)  
 入席時間(各席10名・2時間30分を予定)  
 第1席 9時 第2席 9時50分  
 第3席 10時40分 第4席 11時30分  
 第5席 12時20分 第6席 13時10分  
 第7席 14時  
 申込 電話受付 6月8日(月)10時～

鳴かぬなら・・・

日本三鳴鳥の一つ「うぐいす」をモチーフとしたうぐいすもち。桜餅と並んで春の餅菓子として親しまれています。

うぐいすもちの歴史は、安土桃山時代の和国(奈良)で開幕しました。豊臣秀吉の弟・秀長の家来で菓子職人の菊屋治兵衛が秀吉をもてなす茶会で自作の餅菓子を献上したところ、秀吉が気に入り『うぐいす餅』と銘じたことに由来しています。その後、うぐいす餅の名前は、治兵衛が郡山城(現在の和歌山県)の門前に店を開店したことにちなみ「御城之口餅」と呼ばれるようになりました。

一方、草創期のうぐいす餅は黄大豆の普通のきな粉をまぶしていたため、色合いも現在のウグイス色(黄緑)ではなく、黄色いきな粉色だったと考えられています。

鶯の羽は地味な茶褐色のため、こちらの方が鶯に近い色合いですが、時代とともに変化し、青きな粉を使いあざやかな黄緑、すなわちウグイス色に近づいていきました。

餡を求肥などで包み、左右に引っ張り鶯の形にし、うぐいす粉(青大豆から出来たきな粉)をまぶしたうぐいす餅のビジュアルになり、奈良から各地へ広がっていき全国区の餅菓子となったようです。あなたはどちらがお好きですか？



お茶の風景(32)

ラッピング

濃茶席で水指の蓋が閉まると、客側から茶入、茶杓、仕覆拝見の音が掛かります。仕覆は茶人の保護袋ですが、染や織の裂の由緒を語り、時には複数の仕覆が披露され、表舞台を飾る茶道具としての扱いは、ただの袋とは思えません。

商品を保護する包装紙や紙袋も、デパートやブランドのそれが本来の役目以外に高級感を漂わせ、見慣れたバラやカーネーションが洒落た紙で包装されると一段と豪華な表情を見せるのと共通するものを感じます。

最近、広告目的の意匠フィルムで包まれた飛行機やバス、電車をよく見かけます。カラフルな絵柄でラッピングされた機体や車体はさながら動く美術絵画。中国に返還されて話題になったパンダや水族館で泳ぐ魚が可愛い絵になってコトデンの線路を走っているのを見かけました。

「油照り踏切に行く鯨たち」  
梅雨の晴れ間はまぎれなき夏です。



写真提供・ユニバーサルホーム

財団行事予定 (6月～8月) 休館日水曜日

6月

- ◆ 書道教室 毎月第1・第3金曜日  
森本義人先生  
6月5日(金)・19日(金) 午前10時～12時
- ◆ 和菓子講座  
毎月第2金曜日 高橋初乃先生  
6月12日(金) 午前10時～12時
- ◆ ヤングヤング(子供茶の湯教室)  
毎月第2・第4土曜日 山下純子先生  
6月13日(土)・27日(土) 午後1時～
- ◆ 月に一度の喫茶室 毎月第3火曜日  
6月16日(火) 午前10時～午後2時(受付)  
自由なお時間にどうぞ。(お弁当は予約制)
- ◆ 6月月釜 五人様茶会  
日時 6月21日(日)  
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)  
薄茶 石州流讃岐清水派石州会  
片山宗美  
煎茶 煎茶道静風流 金丸光洋

会費 10,000円(薄茶・煎茶・点心席)  
入席時間(各席6名・2時間15分を予定)  
第1席 9時 第2席 10時30分  
第3席 11時15分 第4席 12時45分  
(各席A席・B席)

7月

- ◆ 書道教室 森本義人先生  
7月3日(金)・17日(金) 午前10時～12時
- ◆ 懐石講座 三友居 山本勝先生  
7月7日(火) 午前11時
- ◆ 和菓子講座 高橋初乃先生  
7月10日(金) 午前10時～12時
- ◆ ヤングヤング 山下純子先生  
7月11日(土)・25日(土) 午後1時～
- ◆ 7月懸釜「北村美術館茶会」  
日時 7月12日(日)  
詳細は、右ページに記載
- ◆ 月に一度の喫茶室  
7月21日(火) 午前10時～午後2時(受付)  
自由なお時間にどうぞ。(お弁当は予約制)
- ◆ 茶の湯をさらに楽しむ夏期講習  
7月25日(土)  
講師等詳細は、最終ページに記載

8月

- ◆ 茶の湯をさらに楽しむ夏期講習  
8月1日(土)・2日(日)・8日(土)・23日(日)  
講師等詳細は、最終ページに記載
- ◆ 書道教室 森本義人先生  
8月7日(金)・21日(金) 午前10時～12時
- ◆ ヤングヤング 山下純子先生  
8月8日(土)・22日(土) 午後1時～
- ◆ 夏季休館 8月12日(水)～15日(土)
- ◆ 和菓子講座 高橋初乃先生  
8月28日(金) 午前10時～12時
- ◆ 茶室 de 若人茶会  
日時 8月30日(日)  
処 晴松亭(当財団茶室)  
席主 高松工芸高校茶華道部  
会費 一般800円・学生300円  
入席時間(各席25名)  
第1席 9時30分 第2席 10時30分  
第3席 11時30分 第4席 13時  
第5席 14時 第6席 15時
- ◆ 月に一度の喫茶室  
8月はお休みさせていただきます。  
お申込みは財団まで。急遽中止になる事もあります。

# 茶華道ガイド

急遽中止等の変更となる場合があります。

## 表千家同門会香川県支部 TEL (087) 845-4638

7/12 表千家流四季茶会 席主：久保宗清  
大西・アオイ記念館 1,000円 9:00~15:00

## 茶道裏千家淡交会香川支部 TEL (0877) 62-4155

6/7 多度津和と輪の集い茶会 席主：淡交会多度津分会  
多度津地域交流センター 800円 9:30~14:00  
7/19 善琴分会 月釜 席主：香川支部青年部  
総本山善通寺 800円 9:00~14:00

## 茶道裏千家淡交会高松支部 TEL (087) 841-0605

〈淡交会高松支部月釜〉 時間指定  
大西・アオイ記念館 1,000円 9:30~15:00  
6/7 席主：岡宗扶  
7/5 席主：田中宗聖  
9/6 席主：高松青年部

## 煎茶道三癸亭賣茶流高松仙友会 TEL (087) 898-3655

6/21 高松市茶華道協会 文化祭 華展と茶席(二席あり)  
席主：中條玲子 玉藻公園披雲閣 檜の間(椅子席)  
2,000円 9:00~15:00

## 武者小路千家香川官休会 TEL (087) 862-8574

〈香川官休会 月釜〉 無量寿院 1,000円 9:00~15:00  
7/5 席主：多田妙容

## 東讃茶道懇話会 TEL (087) 898-0391

8/9 第56回七夕茶会 席主：石州流 池戸西徳寺  
1,000円 8:00~14:00(受付終了)(茶せん供養7:30~)

## 大西・アオイ記念財団 TEL (087) 880-7888

6/21 大西・アオイ高校茶会 席主：高松商業高校茶道部  
大西・アオイ記念館 400円 9:00~14:30  
7/26 大西・アオイ中学茶会 席主：龍雲中学校伝統文化継承部  
大西・アオイ記念館 400円 10:00~  
9/13 10周年記念文化講演会「茶と大徳寺」  
講師：大本山大徳寺別院徳禪寺住職 橘 宗義  
サンメッセ香川2階大会議室 1,500円 12:30~13:50  
9/13 10周年記念茶会 席主：裏千家淡交会高松支部  
大西・アオイ記念館 1,000円 9:00~15:50

## 高松市香南歴史民俗郷土館 TEL (087) 879-0717

〈由佐城月釜茶会〉 第2研修室(和室)  
前売券900円・当日券1,000円 9:30~14:30  
6/21 席主：真子宗博(表千家)  
7/19 席主：嶋崎宗代(石州流讃岐清水派石州会)  
8/16 席主：安田宗輝(裏千家 香南町こども茶華道教室)

## 財団からのお知らせ

第12回

### あ・うんの数寄講座

### 「茶の湯をさらに楽しむ夏期講習」

本年度の夏期講習の日程が決まりましたのでご案内致します。

会場 財団茶室「晴松亭」広間

時間 ①午前の部 10時30分／②午後の部 14時~の2回

定員 各回20名

会費 10,000円(5回セット券)、高校・大学生は5,000円

申込 6月15日(月)午前10時より電話にて受付開始

参加ご希望の方は、事務局までお申込み下さい。お申込みの際は、午前か午後のどちらかのコースをお選び下さい。



第1回 7月25日(土)

菅原文葉(唐紙師)  
「唐紙のつとめ」



第2回 8月1日(土)

依田 徹(遠山記念館学芸課長)  
「久松勝成の茶—高松藩出身の松山藩主—」



第3回 8月2日(日)

伊住 禮次朗(茶道資料館副館長)  
「茶道の近代化と、これからの茶の湯」



第4回 8月8日(土)

赤沼 多佳(茶陶研究者)  
「利休居士の茶道具」



第5回 8月23日(日)

唐澤 昌宏(国立工芸館主任研究員、国立工芸館前館長)  
「近・現代の工芸と茶の湯のうつわ」

## 編集後記

子供の日に前にしたある日、庭先に竿を立てて大きな鯉のぼりを泳がせているお家を見かけました。ほんとうに久しぶりでした。

各地で地元の方々から寄付された鯉のぼりを川にロープで張り巡らせたり、砂浜で一斉に泳がせたりしている風景もみられます。高知では、鯉ならぬ鯉のぼりが川面を泳ぐ様子が紹介されました。

鯉のぼりや武者人形を飾るだけでなく、子供の健やかな成長を願う伝統行事を催したり菖蒲湯やお菓子でお祝いをしています。古よりつたわる謂れも併せて知ることがとても大切だと思います。

家庭のみならず地域での行事に参加し、子供の成長を願うと共に伝統文化も大切に受け継がれて行けば良いなと思います。

「声・情報お寄せください」

〒760-0017

高松市番町二丁目一十二

公益財団法人 中條文化振興財団 編集部

TEL (087) 826-1335

FAX (087) 826-2212

info@chujo-zaidan.or.jp